

参考資料

今回の稿 (No.74) の2頁目中程で G. ブロッカーが『無意味の意味』で引き合いに出した古代ギリシャのアリストテレスの有名な「四原因論」を扱ってありますが、これはオグデン・リチャーズの『意味の意味』とともに本会での EP 本 III でもポイントとなっています。前々回の稿 No.72 でも触れたことです。

何かと他にもポイントはあると思えるのですが、今回4頁目で扱った EP 本 I (p.14) で初出となる ‘will take’ も要注視でしょう。前回9月号の Newsletter にこれを「時制」とし「3つの時制」とされている会員の書き物を見かけました (p.5) が、ラテン系言語などとは違い英語にはいわゆる時制は実際には現在時制 (present tense) と過去時制 (past tense) の2つしかありません。EP 本での will take は未来時制ではないわけです [今回の稿 (4頁目) を参照ください]。今回、内容的に関連する事項として実は「時制」(tense) の問題を含め EP 本 I, p.14 の例文を原稿中で引き合いに出していたなか、偶然にも会員による同じ例が9月号 Newsletter に出ていて絶妙な一致です。

この9月号に貴会員による書き物もあり、目下の連載拙稿で何かと私も注目している2項対立 (binary opposition) を扱われました。また、see through での空間詞 through に注目されました。through は英語でよい語でこれが存分に使えるとよいのですが、入門期を終えた4年目以降には目 (eyes) に見える状況 (visually seen) でのものばかりでなく、さらに発展的に実際には目には見えず心 (the mind's eye) で見るレベルをどんどん取り込むのが手早いと私は思っています。人の心を理解する例なら I saw him on TV last night. He said something strange. What was he talking about? I am unable to see through him. (昨夜、彼をテレビで見たが何か妙なことを言っていたなあ、いったい何を言っているんだろう？ 彼の本質が見抜けない) などと自問自答することもあるかもしれません。EP 本ではこういう例は見ません。

入門期以降の次の3年間では文学作品の抜粋読みもするわけですが、さらに次の大学での文学作品の講読ではまさに見えない心の中の世界に入ります。しかるべき見定めをしないと簡素な文体の E. Hemingway の文学作品すら読めない理屈になってきます。文学作品は Hemingway のものが読めないとなると、他の文学作品の reading は難しいはずでしょう。彼の作品 (私はほぼ全作品を読みました) はすべて例外なく視覚的に目に見えるように書かれます。ただし、意図的 (漢字が示すように「意図」も一種の心の図絵でしょう) に隠された部分を読み手が see through していくことになります。この Hemingway の書き方は「氷山の一角」(tip of the iceberg) 説と言われ氷山の見える部分のみを書き、書かれず見えない部分が水面下に隠されています [Hemingway 文学に関しては本会 Year Book での拙論を参照ください]。

see through に関し私の体験ですが、アメリカで “Two hundred dollars will see me through a week.” という英語を聴いてハッ！としたことを思い出します (金額そのものは正確には覚えていませんが)。そのとき話の脈絡 (textual context) から意味は分かりましたが、大変よい英語だと思いました。「私は (小遣い) \$200 あれば1週間はやりくりできる・過ごせる」のような意味ですが、母語話者には瞬間に分かつて日本人には難しいはずです。文単位ではなく text 文中に織り込んでのこういう英語ばかりを日常的に特別に収集するとぐいぐい自信がつき、他に抜きん出るはずと思っています。語感が養われるはずです。この文は Basic 世界語の範疇 (Wider Basic) と考えてよいでしょう。

‘through’ は目下の連載拙稿でのテーマからは「移動事象」(motion event) に関わるもので ‘from α through (past) β to γ’ の構造での経路 (Path) 描写となります。経路描写の研究は価値あるものと思っています。この ‘through’ に関する語釈、今後さらに思索されるのは如何でしょうか。私も特別に注目している語の1つで、目下連載の「語釈」でもたびたび扱っています。英語の移動事象での経路描写 [through (past) β] は元々は学生時代からの私の注目点でもあります [連載中の過去の稿 No.70 等々、またやはり本会 Year Book での拙論を参照ください]。motion は五感の1つの視覚 (sense of seeing) ではなく「第六感 (6th sense) の運動覚 (sense of motion)」で、これへの注目となります [EP 本なら II, pp.129-131 参照]。このあたりは目下の連載では今後の稿ですが No.77 で扱っています。また motion に関しては EP 本 II, pp.82-88 での Newton 風のものや、III, pp.94-95, pp.104-106 での Galileo や Newton 風の見方以前に実ははるか紀元前のアリストテレスによる motion 理論 (Aristotle's theory of motion) も知られています。

本会では語釈 (lexical interpretation) として Basic 世界語彙の各語の根っからの意味の見定めをするわけで、Newsletter 9月号で貴会員が注目された語 clear ならそれを用いて I see a clear see-through bag over there on the seat. Whose bag is it? Isn't it Mary's? Maybe so. (あそこの椅子の上にビニールバッグがあるけど誰の？ マリーの？ 多分そうでしょう) などとまたも自問自答することがあるかもしれま

せん。そもそも人間にとって道具 (instrument) としての bag が bag と認識 (see) できるのは、冒頭でのアリストテレスの四原因論 (Aristotle's theory of causality) からすれば i) material cause (質料因) が布、ビニール・革など、ii) formal cause (形相因) が型・パターン・デザイン、iii) efficient cause (作用因) が手作り・機械織り、iv) final cause (目的因) が物入れとなるでしょう。ii) はアリストテレスの師であったプラトン(Plato) のイデア(Idea)となる目に見えない精神的心の中の在り方で、文字通りプラトン風(platonic)の世界でしょう [EP 本なら III, p.138, p.145, p.168, pp.226-227 など参照、ここでの p.227 ではアリストテレスに関する例が出され四原因論を垣間見ます(冒頭で言いましたが、本連載前々回 No.72 で扱いもしました)]。人間は毎日、自問自答しながら生きているわけで、この「自問自答」(self-questioning)の問題にもっと注目されてよいでしょう。「自問自答」と、いわゆる「独り言」とは区別はしたいです。In our everyday existence we are talking to ourselves, yes, we are saying something to ourselves in words at all times.

Basic 世界語彙各語の root sense の見定めと共に一方でその expansion (拡張) も考えたいのですが、あまり expansion しても Basic 世界語の範疇から外れる例もありその点では別な見定めも必要となってきます。たとえば語 thin の例なら、Out of thin air the top of the mountain came into view. (ひょっこり突然、山の頂上が見えた) のような文となると、Basic の範疇とは考えにくくなるでしょう。こういう母語話者にはすぐ理解される英語でも「拡張 Basic (Wider Basic)」となり得るか否か? (Is it within or outside of the framework of Basic?) の Basic 言語の語のもつ意味的境界線の問題も興味深い追究事項だと思っています。意味の問題は実に深淵で、大学の学部での英語学も総論とは別に「各論」での扱いが必要でしょう。

いずれにせよ今回も私の原稿の趣旨内容を通読され、貴会員みずからの思いで何らかのポイントを定めてください。事務局の貴会員が何を選択されるか実は私、いつも楽しみにしているのです。毎回、私としても“なるほど”と納得できる選択 (selection) ・決定 (decision) をされています。聡明な方です。今回の稿 No.74 で図絵を 1 つ入れています。本会では何でも目に見える図絵が好まれますのでそうしてもいますが、ここでは実際には目に見えない水面下にあり不可視の図絵 (mirror-image の図絵) ということになります。

This time again (in the writing No.74) you will see important points for our learning of English as a second language. For example, on the second page (halfway down the page), there is an account taken from G. Blocker's *The Meaning of Meaninglessness* (pp.39-40). It is about the noted theory of the 'Four Causes' put forward by Aristotle of old-time Greece, and we see the same sort of accounts in C. K. Ogden's & I. A. Richards' *The Meaning of Meaning* and I. A. Richards' & C. M. Gibson's *English through Pictures* III (p.227). [At the same time, please see the third and fourth pages of my past writing No.72.]

And in addition, take special note of the two words 'will take' in the statement 'He will take his hat off the table.' seen on the fourth page of my writing this time [See at the same time EP I, p.14].

I had interest in your writing for the September number of the newsletter, in which you took note of the space word 'through' as in 'see through'. It would be good if you'd keep on working on it and do the writing again about 'through' (and others). [As for 'through', please see my past writing No.70, etc.]

I am in the hope that you will go through my four-page writing this time again and get a general picture of it. Everyone in the society seems to be interested in looking at some sorts of pictures in the newsletters. On the last page of the coming number (No.74) there is a picture fixed to an account. It is a picture of fishing which is of my special interest. In fishing you see through the water with your mind's eye.

本会での年度の区切れ目 (9 月) ということもあり少し書きました。有機的につながっているのですが過去の稿と今後の稿の内容把握がさらに容易になればと思っています。今回はこのあたりで締めとします。I'm through with it now.

(なお、Newsletter 用引用箇所、原稿中での誤字などに気づかれましたら連絡・確認ください)。If you come across errors in my writing while taking words from it for the newsletter, please get in touch with me.

ではまた。Good night, now.

後藤 (9/13)